

保育士資格取得予定学生の命の意味づけに関する研究

～生死体験と母性理念，命の意味づけ，本来感に着目して～

Research regarding the Meaning of Life for Students Aiming to Obtain Professional
Childcare Qualifications. – Focusing on Life and Death Experience, Maternal Philosophy,
Meaning of Life as well as Sense of Authenticity –

永瀬悦子*

Etsuko Nagase

This study examines the relevance of life and death experiences, the meaning of life, maternal philosophy, and the sense of authenticity of students aiming for a professional childcare qualification at a professional childcare institution. A self-written study targeting 204 first-and second-year students was conducted. Consequently, six factors with an impact on the meaning of life, namely, a sense of connection to life, a sense of mission, a real sense of life, recognition of maternal role, unconditional love, and a sense of authenticity, were extracted. A study on their correlations confirmed the strong relevance between recognition of maternal role and unconditional love.

I. はじめに

乳児期は保護者の愛情豊かな受容的・応答的関わりにより，人格形成の基礎を培う重要な時期である。エリクソンは乳児期に基本的信頼感の積み重ねの中で，次の欲求も満たされるであろうという待つ力が生まれ，そこから得られる「希望」は生涯にわたって苦境や困難から立ち上がる力，「生」を支える力になるという¹⁾。このことは生涯にわたる生きる力の基礎が培われることを意味する。子どもの生活の場である保育所は十分に養護・教育の行き届いた環境が必要であり，子どもの要求を満たしながら生命の保持・増進，情緒の安定を図ることが求められる。

「保育所保育指針」²⁾によると，保育における「養護 (Care)」とは「子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助やかかわり」であるとして，生命の保持・情緒の安定について記載されている。「教育 (Education)」とは，「子どもが健やかに成長し，その活動がより豊かに展開されるための発達の援助」であるとし，保育所における保育は養護及び

* 幼児教育学科

教育を一体的に展開されることに特性をおいている。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿があり、それは保育士が子どもとの関わりに考慮すべきものである。その一つに「自然との関わり・生命尊重」がある。育ってほしい姿として、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、身近な事象への関心が高まりつつ好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる」「身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもち、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる」がある。保育士は子どもの生命の保持・養護に努めるとともに、生命の尊重を教育していく役割がある。

命を守り、子どもの育ちに寄り添うことを職務とする保育士自身が、命を大切に思う心を「核」なるものとしておく必要がある。命をどのように意味づけしていくか、この課題は子どもだけの問題ではなく、子どもを育てる保育者自身にとっても重要な課題である。倉橋(1976)³⁾は子どもたちの中において「性格の底からにじみ出る真実性だけは、どんな幼い子どももの心にも届かずにはいない」という。「ヒト」が「ヒト」を育てる保育・教育には保育者(親・教育者含む)のにじみ出る真実性は隠せない。また梶田(2007)⁴⁾は「大人たちの生や死に対する真摯なまなざしが、子どもたちに命の大切さと向き合う力を与える」という。大人である保育者(親・教育者含む)が豊かでしなやかな感性をもち、その実生活でも喜びや苦しみ等の豊かな体験をしていくことで子どもたちと一緒に命の大切さを考え命と向き合う姿勢をもつことが大切である。

保育士養成課程では、このような社会的課題に対応すべく、命の大切さや意味づけを教科内容にとりいれ教育していく必要がある。そのためには、保育を学ぶ学生自身を理解する基礎資料とするべく、保育士資格取得予定学生の命の意味づけを明らかにしたい。

植田(2000)⁵⁾は保育系短期大学女子学生を対象とした研究で「『いのち』を尊いと思っている者ほど、『いのち』に形あるものとしてイメージをもっている者ほど養護性が高い」としている。「命」の尊さは養護に大きな影響を及ぼす要因である。しかし、命をどのように意味づけ・価値づけているのかについてはふれていない。子育てに関わる保育士を対象とした研究として、松村(2007)⁶⁾は「幼く小さい生命を尊重しようとする意識的な交流などはそこに存在する相互作用により生成され発達する」ことを示した。また、花沢(1992)⁷⁾は「養護性は男女とも、乳児の世話をした経験の多少により決まる」ことを明らかにしている。命の尊さと養護性は関係し、その養護性は乳児の世話をした生活経験と関係する。養護に関係する母性意識は「生体験」にも関係するのではないだろうか。花沢の研究は専門職である保育士を対象とした研究の知見であり、これから保育士となる学生を対象としてはいない。「命」の尊さをテーマにした保育実践に関する研究⁸⁾は散見するが、保育士資格取得予定学生を対象とした「命」

に関連する研究は未だ十分な検討がなされていない。研究による裏付けが十分でない課題があるため研究成果の蓄積が必要である。そのためにも、子どもを守り育てる保育士となる学生を対象とした実証的知見の積み重ねをしていくことが必要課題である。

命を育むことは子どもを産み育てる母性意識と関係する。本研究において、母性に関する意識は命を育む意識を規定する関係にあり、それには確固たる自分自身をもつことが主軸にあると考えた。「生体験」と「死体験」はそれぞれ関連し合うと共に、「本来感」を介して「母性意識」に関連する。「生体験」は「母性意識」に関連し、それらは「命の意味づけ」に関連する。「命の意味づけ」「母性理念」「本来感」を保育教育に関連する重要な要因と考えた。

本稿は、子どもの命を守り生命尊重を教育していく養護・教育実践者となる保育士資格取得予定学生を教育していくための基礎資料とするべく示唆を得ることを目的とする。そのために、①命の意味づけの因子構造を抽出する。②抽出された因子間の関連をみる。③命の意味づけの構成因子「生」体験・「死」体験との関係を確認する。また、本稿における言葉の定義を示す。「生体験」や「死体験」は家族の誕生や家族の死に関わった体験をいう。「本来感」とは自分自身に感じる本当らしさの感覚⁹⁾をいう。

II. 方法

1. 研究協力者の概要および調査の手続き

保育士養成校である短期大学の女子学生204名を対象とした。質問紙調査を実施した。研究協力者である短期大学部の学科においては、保育士資格と幼稚園教諭2種免許を一緒に取得するコースを設けており、ほとんど全ての学生が免許・資格双方を希望している。

調査は2014年12月11日～12日に実施した。倫理的配慮について説明をして、調査用紙の回収は教室の後方に設置して自由に投函できるように配慮した。

2. 倫理的配慮

研究の目的・意義・方法について説明するとともに、研究協力者の自由意志の尊重、匿名性の保障、質問紙の返送をもって同意が得られたものとするを文書にて説明した。本研究は郡山女子大学研究ヒトを対象とした研究に対する倫理委員会の承認(平26-4)を受けて実施した。

3. 調査内容

1) 協力者の属性

学生の背景を理解するため、年齢と日常生活の体験の中で誕生に関わった生の体験・死の体験の有無に関して尋ねた。

2) 測定尺度

(1) 命の意味づけに関する意識

命の意味づけに関する意識は、池田(2013)¹⁰が作成した「命の意味づけ尺度」60項目で、因子負荷量.5以上に絞り、心理学者と研究者の協議の上、適切であると判断された27項目を選定した。測定尺度は「全くそう思う」を5点、「全くそう思わない」を1点とした5段階で回答を求めた。

(2) 母性に関する意識

母性に関する意識は花沢(1992)¹¹が作成した「母性理念」19項目を用いた。母性理念肯定項目は得点が高いほど母性意識が高いことを示す。母性理念否定項目は得点が高いほど母性意識が低いことを示す。測定尺度は「全くそう思う」を5点、「全くそう思わない」を1点とした5段階で回答を求めた。母性理念否定項目は逆転項目とし「全くそう思わない」を5点とした。

(3) 自分らしさに関する意識

自分らしさに関する質問紙は伊藤・児玉(2005)¹²が作成した「本来感尺度」7項目を用いた。測定尺度は「全くそう思う」を5点、「全くそう思わない」を1点とした5段階で回答を求めた。逆転項目は「全くそう思わない」を5点とした。

4. 分析方法

質問項目の天井効果、フロア効果を確認し、該当する項目は削除した。項目間相関係数の検討後に構成要素を検証するために探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。項目削除の決定はスクリープロットの傾斜の変化を参考にしたが、最初に設定した構成要素との関連を見比べながら解釈の可能性を重視した。「命のつながり感」と「命の尊重への関与」「命の実感」「母親役割認識」「無償の愛」「本来感」の関連をみるために、各因子間のPearsonの積率相関係数の算出を行った。「生体験」と「死体験」は各因子間との関係をみるために2要因分散分析の算出を行った。分析には統計ソフトSPSS22 for Windowsを使用した。

Ⅲ. 結果・考察

1. 調査対象者の属性

質問紙は204部配布し、回収数は201名(回収率98.5%)であり有効回答数は194名(95.1%)であった。対象者は全て女性であり、平均年齢は19歳であった。家族の「誕生」に関わった「生経験」は「有る」が114名(58.8%)であり、「無い」が80名(41.2%)であった。内訳は「妹」「弟」「姪」「甥」があった。家族の「死」に関わった「死体験」は「有る」が107名(55.2%)であり、「無い」が87名(44.8%)であった。内訳は「祖父」「祖母」「曾祖父」「曾祖母」があった。

学生が人間の自然な営みとして存在する「生」と「死」に関わる体験が、日常生活において約半数であったことは、生死に直結する命の尊さや意味づけを考える機会を改めて設ける必要があると考えられる。子どもの成長発達を見守り、健やかな育ちを促す保育士の原点は「命を守る」ことにつながる。改めて命について考えていく必要がある。

2. 因子分析結果

フロア効果のある項目はなかったが、天井効果のあったもの11項目を削除した。42項目で主因子法、プロマックス回転を用いて因子分析を行った結果は以下の通りである。

1) 命の意味づけに関する意識

質問紙の各項目の平均得点は3.5~4.5であり、フロア効果はなかったが、天井効果のあったもの7項目を削除した。因子分析は最尤法、プロマックス回転により行い、固有値1.0以上を基準に因子数を決定し、因子負荷量.35未満の項目を除いた。最終的に残った17項目の因子分析を行った結果、3因子を抽出した。

第1因子は「自分の命は後の世の誰かに受け継がれる」「自分の命は次の世代につながっていると思う」「次の世に命を残すことで自分の命の意味は生まれると思う」など、命のつながりに関する意識を表現しているため「命のつながり感」と命名した。第1因子のクロンバック α 係数は.91であり、内的整合性が高いことを確認した。

第2因子は「人の命を救うことに役立ちたい」「与えられた命を人のために活かしたい」など、命があるが故にうまれてくる人の役立つことをしようとする意思を表現しているため「命の尊重への関与」と命名した。第2因子のクロンバック α 係数は.92であり、内的整合性が高いことを確認した。

第3因子は「この世に命として生を受けたと感じる」「自分が生きていると心から感じる」など、命を受けたと自分自身が感じていることを表現しているため「命の実感」と命名した。第3因子のクロンバック α 係数は.86であり、内的整合性が高いことを確認した。回転後の各項目の因子負荷量を表1に示す。

2) 母性に関する意識

質問紙の各項目の平均得点は2.5~4.4であり、フロア効果はなかったが天井効果のあったもの4項目を削除した。因子分析は最尤法、プロマックス回転により行い、固有値1.0以上を基準に因子数を決定し、因子負荷量.35未満の項目を除いた。最終的に残った13項目の因子分析を行った結果、2因子を抽出した。

第1因子は「子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである」「女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる」「子どもを生んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」など、母親の役割に関する認識を表現していることから、「母親役割認識」と命名した。クロンバック α 係数は.89であり、内的整合性は高いことを確認した。

第2因子は「わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる」「わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る」「母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である」など、見返りを求めない愛情を表現していることから「無償の愛」と命名した。クロンバックの α 係数は.85であり、内的整合性が高いことを確認した。回転後の各項目の因子負荷量を表2に示す。

3) 自分らしさに関する意識

質問紙の各項目の平均得点は3.2~3.7であり、フロア効果と天井効果の項目はなかった。「他人と自分を比べて落ち込むことが多い(逆転項目)」の項目は、因子負荷量が.25と低かったためこの項目を除いた。最終的に残った6項目を主成分分析、バリマックス法を用いて因子分析を行った結果、1因子を抽出した。

第1因子は「いつでも揺るがない『自分』をもっている」「いつも自分を見失わないでいられる」など自分らしさを表現していることから「本来感」と命名した。クロンバックの α 係数は.93であり、内的整合性が高いことを確認した。回転後の各項目の因子負荷量を表3に示す。

表1 命の意味づけに関する項目の因子分析結果

	M (SD)	I	II	III	共通性
第I因子：命のつながり感					
自分の命は後の世の誰かに受け継がれる	3.76 (.99)	.95	-.05	-.96	.71
自分の命は次の世代につながっていると思う	3.91 (.95)	.88	-.20	.09	.71
次の世に命を残すことで自分の命の意味は生まれると思う	3.53 (1.64)	.79	-.10	.09	.70
自分は後の世に命を残すために存在している	3.67 (.97)	.73	-.05	.10	.65
他の生きとし生けるもの全てと自分の命はつながっている	3.87 (.95)	.70	.23	-.10	.77
自分の命はすべての生き物の命につながっていると思う	3.76 (.97)	.68	.23	-.05	.75
人も自然もあらゆる命はつながっていると思う	4.12 (.82)	.61	.07	.07	.58
自分の命の証をこの世の中に残していきたい	3.78 (.96)	.52	.22	.00	.53
第II因子：命の尊重への関与					
人の命を救うことに役立ちたい	4.11 (.81)	.01	.99	-.15	.82
人の命を救うことに力を尽くしたい	4.03 (.81)	-.14	.98	.04	.83
与えられた命を人のために活かしたい	4.08 (.88)	.08	.75	.07	.81
限りある命を誰かのために活かしたい	4.06 (.88)	-.04	.74	.17	.78
亡くなった人の命を意味あるものにしてあげたいと思う	4.16 (.83)	.17	.50	.12	.66
第III因子：命の実感					
この世に命として生を受けたと感じる	4.11 (.78)	-.01	-.01	.88	.69
自分が生きていると心から感じる	4.18 (.77)	-.04	-.01	.87	.70
自分の身体のすみずみまで命が宿っている	3.87 (.90)	.12	.08	.60	.63
生命の輝きを実感する瞬間がある	3.86 (.89)	.15	.01	.52	.54
	因子間相関	I	.63	.64	
		II		.51	
		III			

注) 小数点第三位で四捨五入した。

表2 母性意識に関する項目の因子分析結果

	M (SD)	I	II	共通性
第I因子：母親役割認識				
子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである	3.03 (.08)	.88	-.01	.73
女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる	3.03 (1.07)	.85	.07	.77
子どもを産んで育てなければ、女にうまれた甲斐がない	2.56 (1.21)	.82	-.02	.63
育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	2.94 (1.13)	.81	.06	.70
どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	3.22 (1.03)	.69	.84	.56
赤ちゃんを産んではじめて、子どものかわいらしさがわかる	3.29 (1.19)	.60	.12	.53
母親が子どもの成長を生きがいにするのは間違っている	2.76 (1.05)	.47	-.20	.16
第II因子：無償の愛情				
わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる	4.12 (.78)	-.23	.96	.57
わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る	4.07 (.77)	-.62	.82	.57
子どもを育てるのは、生みの母が最良である	3.93 (.93)	.15	.61	.52
わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない	4.14 (.85)	-.02	.61	.37
母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である	4.01 (.92)	.15	.59	.49
赤ちゃんを無事産めるためなら、どんな苦しみもがまんできる	3.84 (.97)	.13	.55	.47
	因子間相関	I	.63	
		II		

注) 小数点第三位で四捨五入した。

表3 自分らしさに関する項目の因子分析結果

	M (SD)	I	共通性
第I因子：本来感			
いつでも揺るがない「自分」をもっている	3.36 (.99)	.89	.74
いつも自分を見失わないでいられる	3.27 (.95)	.88	.69
いつも自分らしくいられる	3.47 (.98)	.88	.72
これが自分だ、と実感できるものがある	3.5 (.95)	.84	.62
人前でありのままの自分が出せる	3.27 (1.02)	.83	.59
自分のやりたいことができる	3.52 (.90)	.80	.55

注) 小数点第三位で四捨五入した。

因子分析の結果最終的には「命のつながり感」「命の尊重への関与」「命の実感」「母親役割認識」「無償の愛」「本来感」の6因子を抽出した。

3. 各尺度間の2変量相関

「命のつながり感」「命の尊重への関与」「命の実感」「母親役割認識」「無償の愛」「本来感」の各変数間の相関関係を算出した。その結果を表4に表す。

「命のつながり感」と他の因子との関連については、「命の尊重への関与」($r = .62, p < .01$)、「命の実感」($r = .64, p < .01$)、「母親役割認識」($r = .46, p < .01$)、「無償の愛」($r = .52, p < .01$)、「本来感」($r = .41, p < .01$)と、有意な低い正相関を示した。「命の尊重への関与」と他の因子との関連については、「命の実感」($r = .60, p < .01$)、「母親役割認識」($r = .39, p < .01$)、「無償の愛」($r = .44, p < .01$)、「本来感」($r = .22, p < .01$)と有意な低い正相

関を示した。「命の実感」と他の因子との関連については、「母親役割認識」($r = .32, p < .01$), 「無償の愛」($r = .46, p < .01$), 「本来感」($r = .43, p < .01$)と有意な低い正の相関を示した。「母親役割認識」と「無償の愛」は($r = .58, p < .01$), 「母親役割認識」と「本来感」は($r = .38, p < .01$)であり、「無償の愛」と「本来感」では($r = .35, p < .01$)と有意な低い正の相関を示した。

保育士資格取得予定の学生の命の意味づけに与える影響要因を考察するために、「命のつながり感」「命の尊重への関与」「命の実感」「母親役割認識」「無償の愛」「本来感」の6因子それぞれとの相関関係を検討した。その結果、「母親役割認識」と「無償の愛」に関連性が強いことが示された。これは命には見返りを求めない「無償の愛情」が必要であり、それには「母親役割を認識」することが重要であるという考えがわかった。「命の実感」と「命の尊重への関与」に関連性が強くあり、命があることを実感してこそ命を人のために活かしたい、命があるが故に人に役立つことをしようとする心が醸成されるという考えを確認した。「命のつながり感」と「命の尊重への関与」「命の実感」「無償の愛」に関連性が強いことが確認されたことから、先の相関分析の結果を考慮して、「命のつながり」は「命を実感」として感じそれを育もうとする「命の尊重への関与」、それに対し「無償の愛」を注ぐ母親の存在があってこそ成り立つと捉えることができる。

表4 各尺度間の相関係数

	命のつながり感	命の尊重への関与	命の実感	母親役割認識	無償の愛	本来感
命のつながり感	—					
命の尊重への関与	.62**	—				
命の実感	.64**	.60**	—			
母親役割認識	.46**	.39**	.32**	—		
無償の愛	.52**	.44**	.46**	.58**	—	
本来感	.41**	.22**	.43**	.38**	.35**	—

注) 小数点第三位で四捨五入した。

** $p < .01$

4. 「生」体験と「死」体験の有無と各因子得点の検討

各因子得点と「生」及び「死」体験の有無の差を検討するため、体験(生体験・死体験)を独立変数とし、「命のつながり感」得点、「命の尊重への関与」得点、「命の実感」得点、「母親役割認識」得点、「無償の愛」得点、「本来感」得点を従属変数とする2要因分散分析を行った(表5)。主効果が示されたものには多重比較(Tukey法)を行った。

その結果、「命のつながり感」は「生」体験に有意傾向がみられ($F(1,19) = 6.54, p < .01$), 多重比較(Tukey法)の結果、「生」体験が「有る」より「無い」方が、「命のつながり感」が有意に高かった。「母親役割認識」は「生」体験に有意傾向がみられ($F(1,19) = 6.85, p < .01$),

多重比較 (Tukey法) の結果, 「生」体験が「有る」より「無い」方が, 「母親役割認識」が有意に高かった。命を育む保育士資格取得予定の女学生は生・死体験に遭遇すれば, より命を尊重した命の意味づけ項目や母性意識項目と関係が強いと推測したが, 「命のつながり感」と「母親役割認識」だけが「生」体験と主効果がみられた。これは学生自身が弟や妹の誕生をより現実的な体験と捉えているとも推測される。

先行研究において, 生死体験と命のつながり感や母性意識との関係をみた研究はないが, 一般学生の育児技術体験と児に対するイメージを明らかにした研究がある。中越 (2009)¹³⁾ は乳児との接触経験とイメージ因子との関連でオムツ交換を2~3回経験した一般学生が, 「経験無し」の学生に比べ「新生児外見性」イメージ得点が有意に低いと述べている。「経験無し」の学生は生命誕生の神秘性を肯定的に捉えるが, 「経験有り」の学生は必ずしも新生児を肯定的に捉えるとはいえず育児を日常生活援助の現実性として強く感じていると考える。

対象学生数が少ないことから断定はできないが, 保育士資格取得予定学生にとり「生」体験は生命誕生の神秘的な側面を感じつつも, それよりもより現実的な日常生活援助の体験に直面した結果, 子どもが生まれ家族員が増えることの母親役割行動の拡大や負担を現実的に捉えていると推測する。それは, 「生」体験がその場面で終結するものではなく, これから継続して続いていく親子関係の責任にも関連していると考えられる。学生にとって「体験」はどのくらい響いているのか, スケールを用いて質問項目を検討すること, 学生が体験した内容を相互に検討していくことも必要である。

表5 「生」体験の有無と「死」体験の有無と各因子間の2要因分散分析

	「生」体験(有)		「生」体験(無)		主効果	交互作用	
	「死」体験(有)	「死」体験(無)	「死」体験(有)	「死」体験(無)			
	(n=71)	(n=43)	(n=36)	(n=44)	F値	F値	F値
命のつながり感	29.56 (6.63)	29.58 (6.00)	32.67 (5.24)	31.02 (5.46)	6.54** (有<無)	.84	.88
命の尊重への関与	20.03 (4.13)	20.40 (3.20)	21.19 (3.31)	20.59 (3.45)	1.59	.05	.81
命の実感	16.14 (2.82)	15.63 (2.95)	16.47 (2.89)	15.93 (2.61)	.58	1.59	.00
母親役割認識	19.93 (5.76)	19.81 (6.21)	22.42 (6.50)	22.00 (5.86)	6.85** (有<無)	.09	.03
無償の愛	23.41 (3.89)	24.65 (4.30)	24.56 (3.71)	24.34 (3.80)	.51	.78	1.56
本来感	20.32 (5.01)	19.4 (5.78)	21.78 (3.37)	20.34 (5.18)	2.70	2.63	.12

** $p < .01$

注) 小数点第三位で四捨五入した。上段は平均値, 下段は標準偏差を示した。F値の下段に多重比較の結果を示した。

IV. まとめと今後の課題

「生」体験が無いほど「命のつながり感」が有意に高く、「生」体験が無いほど「母親役割認識」が有意に高いことが示された。保育士資格取得予定の学生の命の意味づけに与える影響として「命のつながり感」「命の尊重への関与」「命の実感」「母親役割認識」「無償の愛」「本来感」の6因子が抽出された。その相関関係は「母親役割認識」と「無償の愛」に関連性が強かった。これは命には見返りを求めない無償の愛情が必要であることに加え、母親役割を認識することが重要であることがわかった。「命の実感」と「命の尊重への関与」に関連性が強くあり、命があることを実感してこそ命を人のために活かしたい、命があるが故に人に役立つことをしようする心が醸成される考えを確認した。また、「命のつながり感」と「命の尊重への関与」「命の実感」「無償の愛」に関連性が強いことが確認されたことから、命のつながりは命を実感として感じそれを育もうとする関わり因子、それに対し無償の愛を注ぐ母親の存在があってこそ成り立つものであると捉えられた。

本研究により保育士養成施設における保育士資格取得予定の学生は、命のつながりを認識することから命を実感し、無償の愛を注ぐ母親の存在により命の意味づけしていくということが示唆された。しかし、保育士資格取得予定の学生の命の意味づけをみていくためには、今回は女子学生を限定しているが、男子学生を研究対象とした調査をしていく必要がある。また、一般の学生を対象とした結果と比較していく必要がある。家族構成として「ペット」の位置づけも重要であり、家族の一員として含め「家族の概念」を捉える必要がある。更に、学生にとって「体験」はどのくらい響いているのか、スケールを用いて質問項目を検討していくことを考慮した研究は今後の課題である。

付記

本稿は、その一部を第69回日本保育学会にて口頭発表している。

引用文献

- 1) 服部祥子(1998)「生涯人間発達学入門」『看護教育』39(8), pp.605-606.
- 2) 厚生労働省(2017)「保育所保育指針」『フレーベル館』pp.12-13.
- 3) 倉橋惣三(1976)『育ての心(上)』フレーベル館, pp.26.
- 4) 梶田叡一(2007)『「命の大切さ」を実感させる教育への提言(改訂版)』, 兵庫県教育委員会, pp.2-3.
- 5) 植田智(2000)「いのち」イメージと養護性との関連, 『鳥取女子短期大学研究紀要』, 42, pp.9-15.
- 6) 松村恵子(2007)「母性意識に関する実証的研究—子育てに関わる保育士からの分析—」, 『香川母性衛生学会誌』, 7(1)号, pp.11-19.
- 7) 花沢成一(1992)「母性意識の発達」『母性心理学』医学書院.
- 8) 野口伐名(2006)「生命の気づきから尊さを育む保育の想像Ⅲ—保育士の働きかけと幼児の育ちを中心に—」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』, 6, pp.22-41.
- 9) 伊藤正哉, 小玉正博(2005)「自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討」『教育心理学研究』53, pp.74-85.
- 10) 池田幸恭, 落合亮太, 菱谷純子, 高木有子(2013)「命の意味づけ尺度の開発」, 60(6).『厚生指標』pp.15-22.
- 11) 花沢成一(1992)「母性意識の発達」『母性心理学』, 医学書院, pp.80.
- 12) 伊藤正哉, 小玉正博(2005)「自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がWell-beingに及ぼす影響と検討」『教育心理学研究』, 53, pp.74-85.
- 13) 中越利佳(2009)「女子看護学生が持つ赤ちゃんイメージと新生児イメージの構造と特徴」, 『愛知県立医療技術大学紀要』6(1), pp.21-28.

